

小田実全集（小説 第12巻）

列人列景



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

花電車

墓と火

茫

ラブ・ストオリイ

ケシキ調べ

疑問符

あとがき

381 319 251 193 113 65 7

列人列景

花電車

花電車というものはある。女が舞台の上において、ピンポンの玉を出したり入れたりする、あれである。本来の花電車のことではない。もつとも、何が本来なのか。もうかれこれ一年近くも以前のことになるが、そちらのほうが本来の花電車であると思ひ込んでいた女に会った。すくなくともつい先日までそう思ひこんでいたと当の女性が言った。若い子で、二十四歳と私がわざと年上の数字を出して彼女の年齢のことを言うと、やにわに笑い出した。その笑い声にまったく屈託がなかつたから、二十はたちそこそこの年だつたにちがいない。その年で、本来の意味でないところの、彼女自身のことばを借りて言えば、「へんなほうの意味の」花電車のことを知っていたとしてもおどろきに値しない。彼女たち、このごろ、今どきの若い女性が愛読する、このごろ、今どきの女性週刊誌のたぐいには、構造、姿勢、技術（のなかには、フアラチオの技術まで図解入りで入っている）はおろか花電車、シロクロの解説に至るまで情報は豊富なのだ。××銀行という名前を言えば誰でも知っているような大銀行の支店の「ピージー」である（こゝで、「ピージー」という日本製英語を使う誘惑に抗し難い。誰がつくつてはやらせたのか、便利なことばだ。彼女の場合、銀行に勤めていると言つても、「行員」というものではないだろう。彼女の主観においても、彼女を見る他人の意識においても、決してそうではないにちがいない。「会社員」とか「勤め人」とかいうことばも、彼女、そして、世に幾十万、幾百万とい

彼女たちにはそぐわない。やはり、「ビージー」である。すくなくとも、そうとしか言いようのないありようを示すものとして、彼女は私のまえに立ちあらわれて来た。あるいは、強いてほかの言い方を探せば、「オーエル」だろう。これもまた不可思議にして的確な日本製英語だ。彼女が「へんなほうの意味の」花電車のことをふくめてそうした情報に精通していたとしてもふしぎはない。彼女が花電車ウンヌンのことを言ってから私は彼女のその種の知識の量と正確度をたしかめてみたい誘惑に駆られたが、そうは言っても、べつに近くのモーターにも出かけて実地にたしかめたかかったのではない。なにしろ彼女とは初対面だし、それほどの魅力にもみちていなかった。それで、事実はいくまで口頭でそれをたしかめたかかったということになるが、私がしなかったのは、彼女があまりに無邪気にそれだけの知識を披露したからだ。そして、そのあと、この夏、山陰地方に銀行のお友達二人と旅に出かけたときは楽しかった。あそこには自分たちの見失なってしまった古き良き日本、なつかしい故郷のような日本が残っているみたいと、本来の意味の花電車にも「へんなほうの意味」のそれにもたいていかかわりあいのない、このごろはやりの国鉄の思わせぶりの観光ポスターにあるようなことを、たしかに楽しかったことだけは着実に判る口調でそのまますぐつづけて言った。

彼女とは知り合いであったわけではない。Y市に所用で出かけて、その所用をすませたあと列車を待つあいだ駅前であらうぶらしていたら、横手の本屋から出て来たのが彼女だった。今その店で買ったばかりらしい本の紙包みを小わきにかかえて、若い女性にしてはいくぶん疲れ気味の地面に足をこすりつけるような歩き方で出て来た彼女と出会いがしらに眼が合つて、とたんに、アツと声を出した。知り合いかと思つたが、そうでもないらしい。私があるまま横を通り抜けようとしたら——さんです

か、とようやく言った。それまで黙つてマジマジと私を見ていたのである。私があなずくと、私の本を読んだことがあると言ひ、げんに一冊買ったばかりであるとわきの紙包みをかかえなおすようにして私に見せた。読者の出現であるが、こういうときは困るものである。ことに、このごろ、今どきの若者は男女の別を問わず親父がた、母親がた、先生がたによつてたかつて甘やかされて、話しかけられるのは常に自分、話のツギ穂を見つける義務のあるのはきまつて相手というぐあいに世の中のありようをみきわめているフシがあるので、なおのこと困る。とどのつまり私があればこれ話題を探して話していて、お茶でものみましようかということになつた。口もとに魅力があつた。面長で、全体が端正なおもむきだが、口が円く小さく、そこから白い歯がのぞいて、感じがよかつた。面長で端正なので年よりふけて見えたが、笑うと、その口のおかげで、たちまち子供っぽくなつた。全体の面長が円くなつて、どうかすると、二十はたちそこの女の子というよりイタズラ盛りの坊やに見えた。それが見たくて、喫茶店での小一時間の話の後半は、私は故意に彼女が笑い出しそうな話題を選んでいたきらいがないとは言えない。彼女と別れたあとで、はつきりそう思つた。

さつきも述べたが、彼女はその市の××銀行の支店の「ピージー」であつた。支店は本屋の近く、同じ駅前にある。そういう「一流」のところに勤めているという誇りを、喫茶店に入るまでの街頭でのわずかな時間のあいだの立話のなかでも彼女は無邪気に見せた。ただ、やはり、このごろ、今どきの娘である、同時にそういうところにお勤めをしていることに自分はほかの人とはちがつて必らずしも満足していない、たとえば、東京に行つたときには偶然のことながら通りかかつたベトナム反戦のデモ行進に参加したことがあると、これも街頭での立話のなかで気負つたように言つた。その種の気

負いと言ひ無邪気な誇りと言ひ、それらは青春の附属物であり基本だが、私が彼女を喫茶店に誘つたのは、べつに彼女のベトナム反戦の志こころざしに打たれたせいではない。

何がキツカケで話が花電車のことになつたかはきわめて簡単なことで、私が彼女を連れてあてずっぽうに入つた喫茶店の名前が「花電車」だつたのだ。東京の街の昨今のvarietyをY市Y市のそれと比較することから始めてデモ行進のことから女の子の服の流行のことから今度芥川賞をもらつた女流作家の小説のことからY市の名物の押しズシのことから話はいかようにも進み、弾んだが、いや、もつと正確に言つと、私が進ませ、弾ませたが、話の半ばでタバコに火をつけ、その拍子にマッチの箱を見ると、その店の名前が「花電車」だつた。私とその通り声をたてて読んでみせると、彼女は何かおかしいのか急に笑い出し、イタズラ坊やの表情で、そのまますぐ、わたし、花電車というと、へんなほうの意味の花電車ばかりだと思つていたんですとよどみなく言つた。いや、さらに彼女は同じよどみのない口調でつづける。お祭りなんかのとき、市電に飾りつけしたりするのも花電車と言つてすつてね。わたし、知らなかつた。

前者の意味の花電車のことを知つたのも女性週刊誌なら、後者の飾りつけしたりするのも花電車と言つたのも、そこから知つた知識だつた。彼女は正直にそんなふうにならぬに私に告げ、その口調にもよどみはなかつた。そして、そのあと、さつきも書いたが、山陰地方の旅の思出話を切れ目なしにやり始めた。

いささかおどろいたが、私はものを書くかたわら大学の教養課程で長年のあいだ若い男女を教へて来ていたから、そういうことにかけてまつたくの初心者ではない。彼らにはいろんなことでいろんなところでおどろかされていて、それだけのことで彼女のことをおぼえていたりはしない。第一、私は

今はもう彼女の告げてくれた名前もきれいなサツパリと忘れ去ってしまったているのだが、別れぎわにやにわに私にぶつつけて来た二つのことはゆえに、彼女のイタズラ坊やじみた表情がどうしても私の記憶から立ち去らない。列車の発車時刻が来て私が別れを告げて立ち上ると、彼女は私をプラットフォームで見送ると言いはり、それは改札口でもらうことにはしてお引き取りを願ったのだが、改札口で彼女はまるで私の妻か恋人のようからだをすり寄せて来て、私の耳もとに口をつけた。東京では浅草なんかで花電車やっているんですって。先生なんか、四十すぎた中年男だからときどき行くんでしょ。今度行くとき、連れてって。電話して下さい。わたし、知りたいんです。

いや、さらに次のようなこともつづけて言った。告白するのはいやだが、そちらのほうが私にこたえたことも事実で、それではつきりと彼女の表情を記憶することになったのかも知れない。楽しかったですと精いっぱい芝居をしている（したがって、それはまったく下手な芝居だった）口調で言い、それからひと呼吸おいて、でも、先生の話、もつと面白いかと思つて期待していません。案外……つまらなかつたと言つたか、面白くなかつたと言つたか、そのところは正確におぼえていない。やにわに平手打ちをくわせられたというほどの衝撃力はなかつたにせよ、読者のままで先生面をしてやに下っている心の隙間に指を突つ込まれたぐらいの感じはあつた。それで思わず私は彼女の顔をふり返つて見たのだが、彼女はまさしくイタズラ坊やのように人なつっこく笑つていた。

二

東京へ帰つてから、私はべつに浅草なんかの花電車に行かなかつた。ただ、浅草そのものを散歩し

ていたとき、ポン引きらしい男に花電車見物を誘われたことがあった。いや、もうひとつ言うと、そのとき、いつになく見物したい気持ちになったことも事実だ。私はもうそのときには彼女の名前も忘れていたが、彼女のことばはまだからだのうちにねばつこく残っていて、ポン引きの勧誘の口上に耳を貸すふりをしながら、眼はしきりにすぐ近くのタバコ屋の店頭の赤い公衆電話を見ていた。もちろん、名前を忘れていくぐらいだから、電話のかけようもない。それは事実だが、そのときそんなふうにして公衆電話を見ていたのもその事実以上のものである。だいたい、私はポン引きに誘われたことがない男だった。私に言わせればそれは私にスキがないからで、友人に言わせると、同じことが人相がわるくて刑事に見えるからだということになるが、とにかくそのときのようにポン引きが私の顔を見るなりたちまち声をかけたというようなのははじめてだった。よほど、物欲しげ、いや、セックス欲しげに見えたのだろう。それは、彼女の、先生なんか、四十すぎた中年男だから、ときどき行くんでしょということばにじかにかかわっていることがらだった。あるいは、推理だった。ポン引きも彼女も、案外、私の心、いや、からだのなかにあるものを見ぬいていたのかも知れない。そして、それは、案外、つまらぬものであるのかも知れない。私は花電車の誘いを受けたことにこだわっていた。誘いを受けて行かないことにもこだわっていた。そんなことははじめてだった。これが四十をすぎた中年ということかも知れないとも思った。

三二

私の考えでは、花電車ほど即物的な見世物はない。性にかかわる見世物には、ストリップというよ

うなのもあるが、あれは、人間のハダカ全体を見せるのであって、一部の局部だけを見せるものではない。もちろん、なかには「医学観察」のようなストリップもあって私も見たことがあるが、「観察」の対象はたしかに局部ではあっても、それはあくまで人体の一部としての局部だ。たとえば、そこに穴ポコがあつても、穴ポコは太モモ、腰、腹、乳房につながり、さらに座席のあるいはカブリツキの観察者を舞台の上から見下す局部の所持者の笑顔が、たとえそれがどのようにつくり笑いの笑顔であろうと（ただし、私は彼女たちの名誉のためにぜひとも言っておきたいのだが、女性はそんな場合決してつくり笑いなどしないものなのである。私の観察体験、人生哲学の双方に基いて主張したいが、女性は、見セテクレヨナ、ドウセ滅ルモノジャアルマイシと切望し懇願する男衆生おとこをまえにしては、慈悲をたれたもう慈母観音の笑いをエンゼンと笑うのである。正直に言うが、そのときほどのエンゼンとした、慈悲もあれば花もある笑いを、女性において私は見たことがない）、花電車の場合でのように穴ポコだけが独立しマシンのように機能することはない。

シロクロというような見世物についても、ことは同じである。花電車にくらべると、あれもまた悲しいほどに人間の見世物、したがってどうしようもなく人間臭い見世物で、穴ポコだけがマシンの動きを示したりはしない（私がここで「マシン」という片カナ英語を使って「機械」と言わないのは、後者を使うと、何かおどろおどろしく巨大なものを感じがして来るからだ。重工業の感じである。「マシン」と言えば、たとえば、「ピッチング・マシン」である。手工業、手づくりの感じで、もともと人間に密着している。人の世のいとなみによりそっている）。あれには女性以外に男性の演技者が必要で、男女が二人いれば、どうあつても射して来るのはくらしの影で、結合するにせよ、別れるにせ

よ、まるで人の世のいなみの模型みたいなものだ。男女の演技者には夫婦者が多いということだが、これも人生の模型であつてみれば当然のことであろう。こうした見世物にまで人間臭さを求める人間主義者ならそれもまたよきかなだが、私は同じ人間臭さなら、模型のそれより実際のありようのなかでそのものを選択するたちだ。シロクロの一方の主役の男性はたいいてい衆人環視のなか一日に何度となくことを行なうことができるという英雄で、それだけでたしかに実人生ばなれがしているが、それでも、雑誌に出ていた英雄の告白談のなかで、英雄においてすら不能の瞬間が訪れることがあつたというのを読んだことがある。まさに英雄もまた人間で、そういう話ほどその事実を感じさせることはない。そこまで話が行かずとも、シロクロの場合、ことには終りがあつて、女性にはなくても一方の主役の男性には確実にあつて、歓楽ツキテ哀歓生ズ。終りは、人生にあつては、たいいてい、悲哀にみちている。

そこへ行くと、花電車には終りが無い。バナナの輪切りなどはいざ知らず、すくなくとも、ピンポン玉の出し入れを見ているかぎり、花電車の主役の穴ポコはその動作をマシンの——つまり、規則的、平均的、無表情的、無感動的につづけて、その動きはあたかも無限運動のように見える。燃料が切れればマシンはパタリと動きを停止するが、花電車のマシンにもそういう即物的なところがあつて、燃料が切れればすぐさまパタリととまる。そして、切れないかぎり、運動はいつまでもつづく。私は、今、「花電車の主役」というふうに穴ポコのことを表現したが、実際、ここでの主役は穴ポコそのものであつて穴ポコの持主では決していないのだ。持主もまた太モモ、腰、腹、乳房、あるいは、さらに上方にそれらにつながる頭、顔をもつが、人びとの眼はまず、そして、何よりも、穴ポコ自体にあつて（ここ

で私がい出すのは、「物自体」という哲学用語だ）、あとはまさしく附属部、いや、あまり物にすぎない。そして、ここがかんじんなところだが、あまり物のほうも人格をもたない物であるなら、穴ボコのほうもまさしく物——「物自体」だ。ここで、「物」を、子供のとき大阪は鶴橋の闇市でならいおぼえた日本語の発音を使って「プツ」というぐあいを読んでおきたい。そのほうがいかにも即物的で、「物自体」に密着している感じだからだ。その鶴橋の闇市には朝鮮人があまたいて、と言うよりはそれこそは朝鮮人が開き、主導権をにぎっていた闇市だが、彼ら朝鮮人もまた、その即物的な日本語の発音方法を好んで用いていて、何かと言うと「プツ」というふうに言った。「プツ」が彼らの場合、「プツ」というぐあいになる。彼らの下働きをして何がしかの日銭ひぜにをかせいでいた私にむかって、彼らは叫び、どなる。オイ、コトモ、ソコノプツ持ツテ来イ。彼らのひとりは私が今日までキモに銘じておぼえている哲学を折りにふれて語った。アノナ、商売ハナ、プツガナイトアカン。ゲンプツガナイトアカン。空手形はアカンと言うのだろう。それは商売においても、革命運動というような政治においても同じだろう。

後年、わたしが東京で大学生になってそれこそ浅草で花電車を見たとき、まず思い浮かべたのは「物」という一語で、それは「プツ」、「プツ」の二様の発音で私の耳に激しくよみがえって来た。いや、同時に、その朝鮮人のオッサンの商売哲学もよみがえって来て、眼前の穴ボコがまさしく「ゲンプツ」であった。女性もまた空手形はアカンというわけだろうが、そのころ、私は、ひとりの女性とまさしく空手形の連発のような恋をしていた。それゆえ、そうした「ゲンプツ」のただけらしい出現、それにともなつての商売哲学のよみがえりは、空手形に充満した密室の扉を蹴破るぐらいの力をもっていた。

花電車を見ていて穴ポコが「ゲンブツ」である気がして来るのは、ひとつには、そこで使われる道具もまた、ピンポン玉とかビール瓶とか、はたまた、バナナとか、そういう「物自体」——「ゲンブツ自体」であるせいかも知れない。バナナはいざ知らず、ピンポン玉とかビール瓶とか、それらはいかに硬質な「ゲンブツ」で、ふつうには、女体という、そのことばだけでいかにもやわらかい感触にみちた「ゲンブツ」にはまったくそぐわないものだ。いや、もうひとつ言うなら、女体の性器と言え、やわらかきとともにねばつこさが特徴であり、とり得であるような「ゲンブツ」だが、ここでも対照的なのはピンポン玉やビール瓶で、それらは少しもねばつこくはない。それどころか、ネバネバ、ネットネットの極端な反対物なのだ。そのネバネバ、ネットネットの極端な反対物が極端なネバネバ、ネットネットのなかに入り込み、出る。入り込み、出る。

そういう動きのなかで変質作用が起つて来ているような気がする。ピンポン玉、ビール瓶、バナナが「ゲンブツ自体」である以上、それらが入り出す穴ポコもまた、「ゲンブツ自体」として存在し始める。ピンポン玉、ビール瓶、バナナが「ゲンブツ自体」の迫力をもって穴ポコにぶちあたるなら、穴ポコのほうも同じ衝撃力でそれら外界の事物にぶちあたる。もう穴ポコは、そのときには、ねばつこく濡れていたりはしないのである。外界が乾けば、それだつて乾く。ピンポン玉が出て来るのを見ると、穴ポコそれ自体がその硬質の乾いた物体——「ゲンブツ」を生み出す感じがする。その力もつている感じがする。そして、その力をもっているゆえに、穴ポコはまさしく「ゲンブツ自体」だ。

悲哀を断ち切ってしまった。すくなくともなまはんかの、それとすぐ判る悲哀を花電車の主役である「ゲンブツ自体」は断ち切っていて、安価な同情をそれは拒否する。早い話、その「ゲンブツ

「自体」は、それが子供を生むということよりも、どこかの密輸事件でつかまった女がそこにおどろくべき多量の物品をおさめていた、そんなふうなありようを示す存在として花電車の見物人、たとえば私の眼のまえにあるのだ。しかし、それでいて、それは、やはり、子供を生む。子供を生む存在としてもある。悲哀を断ち切っていて、しかも、悲哀と言えればこれほどの悲哀もないだろう。「ゲンブツ自体」としての穴ポコは悲哀にみちているというより悲哀そのものだ。いや、それは悲哀を「ブツ」化するほどの力をもっていて、悲哀もまたそこで「ゲンブツ自体」になる。

私はここで非情ということばを使いたくない。世の中には天才という得体の知れない人間の一群がいて、彼らが世界をつくり、こわすのだが、天才のなかにはどのような金庫をも破ってみせる天才もいれば、フランス人のようにフランス語をしゃべる天才もいる。あるいは完全に非情になり得るといふ天才もいて、こういう輩やからほど世の権力者にとって好都合な人間存在はないものだが、私が語ろうとしているのは、私同様、天才でないところのふつうの人間——タダの人のことだ。タダの人である以上、天才のように完全に非情にはなれないだろう。何ごとにおいても中途半端、なしくずしにしかなり得ないのがタダの人の基本原理で、それは非情においても、その反対の極にあると一般に考えられている「やさしさ」というようなものについても同じだ。あるいは、真面目さにおいても、インチキ、チャランポランさかげんにおいても。

若者は、ときには、非情をひたすら求める。それは非情に徹し得ない自分を感じるから逆にそうするのではなく、やはり、自分を非情の天才として錯覚するからだろう。その錯覚が若さの特権であり傲慢だが、ときには、錯覚は集団を形成して一時代の流行をつくる。そして、自分がとうてい天才の

器でないと感じるとき、今度は逆の錯覚にとらえられたりする。この錯覚も一時代の流行をつくるが、たとえば、それが「やさしき」というものだろう。「白け」というものだろう。と言つても、私はここで良識の代表者のような顔をして、若者のことを冷笑しているのではない。私だつて、同じことだつたのだ。そして、あまたの天才の錯覚のなかを歩きつ戻りつしたあげく、どの領域においても自分が中途半端であり、なしくずしであると自分のありようをとらえるとき、人は——いや、私は確実に中年男になっている。いや、中年男の自覚はもうひとつある。それは、天才も善事をなし得るが、タダの人も同じ。まして、悪事をや。

中年男が花電車を見ている。

四

アジアのある国の首都で見た花電車ほど、私にそうしたもろもろのを感じさせた花電車はない。場末のキャバレエとものみ屋とも売春アツセン所ともつかぬ薄暗いところで行なわれていた花電車であつた。雨季で、夜、一天にわかには曇つて豪雨、ずぶ濡れになりながら飛び込んだところがそこだつた。と言うと、いくぶんウソになる。やはり、豪雨のなかで夜目にしるく白いシャツを着た男がどなりたてていた「セックス・ショウ、スケベエ・ショウ、カム、カム」ということばが私の足をそこにむけさせるひとつの要因になつていた。雨宿りする場所はどこでもよかつたのである。と言うと、そこでもよかつたことになる。私に好奇心がなかつたとは言えないが、自分からそんなものを探し求める気にもなつていなかった。若ければ、男に連れられて入るとき、胸のときめきをおぼえただろうが、

私は男に何がしかのチップをやりながら、また見るんだなとそれだけ思った。

まず踊りながら、いや、けたたましい音楽にからだの動きを辛じてあわせながら、股のつけ根のところを押し出して来るのがあった。そのうち、つけ根をおおっていたものを取り去って、なおのこと、押し出す。突き出す。突き出されて来るのは穴ポコだが、突き出されている私はまるで男根を突き出されているような気持になった。

そのあとがピンポン玉である。コップとピンポン玉を手にしたべつの女がまんなかの円い舞台の上にあらわれたかと思つたら、すぐ、これもまたべつのけたたましい音楽が始まった。もちろん、そこはバンドがいるというようなかまえのところではない。テープの音楽である。壁にいつのまにかブルーフィルムがうつつていて、それは、たぶん、ヨーロッパ種のものであった。白いのと黒いのが、このごろのはやはり後者が男、前者が女性というとりあわせだが、激しくからみあい始めた。そして、もちろん、もうそのときには、手まえの舞台の上では、ピンポン玉の出し入れが始まっている。

はじめは自分の手に入れていた。それを、両手でささげもつようにして股のあいだにもつたコップに狙いをさだめて入れる。なかなかうまくまいが、狙いは的確だが、一度は手もとが狂つたのか、穴ポコのほうの狙いがうまく行かなかつたのか、ピンポン玉は舞台の上に落ち、乾いた硬質の音を立ててころがった。ピンポン玉は濡れていたが、照明の光をそだけ受けてそれはよく判つたが、音は濡れていない。それをまた自分の手で拾って、入れる。出す。入れる。出す。そのうち、舞台のまわりの客に入れさせることを始めた。まず、いかにもアメリカ合州国人らしい、白髪、アカラ顔の男。彼の国の今の大統領に似ている。大統領は「サイレント・マジョリテイ沈黙する大衆」を自他ともに代表する人物で、彼がそうなら、

わるびれず、笑いながらピンポン玉を手にとる白髪、アカラ顔の男もまちがいなくもう一方の代表だ。つまり、彼もまた、タダの人であるにちがいない。神の道を異邦で説く牧師かも知れないしジェネラル・モーターズの模範社員かも知れないしC・I・Aのエージェントかも知れない。その誰にでもあり得るのが（その証拠に、大統領にもあり得ているのだ）タダの人の特色であり基本だが、彼は笑いながらもいたって律義にピンポン玉を入れる。出て来たのを、また入れる。

次の当番がアラブから来たらしい、ニコリともしない男。かぶりつきの卓子に水わりのコップひとつをおいて、それを名残り惜しげにゆつくりとのむ。さつきからボーイが何度となくお代りの請求を催促するが、その度に右手を大きくふって一向に動じるけはいもない。ピンポン玉のほうは断わらなかつた。彼もまた几帳面に入れる。ニコリともしないで、そうする。三番目は日本人だつた。白いシャツが好きで日本人には珍しく色物のシャツを着ていたが、私は彼が日本人なのを知つていた。カタコトの日本語を話すボーイに日本語で受け答えしているのをきいたからだ、中国人なら、ピンポン玉を入れるときにあんなふうには照れたようにうすら笑いたりしない。彼もまた几帳面に、しかし、いかにもおずおずと入れた。四番目もまた、日本人。つまり、私。私は意識してうすら笑いを避けたが、ピンポン玉を手にした私の動作は同じように几帳面で、ぎごちなかつたにちがいない。

女はドー猛な顔をしていた。決してまづい顔だちの女ではなかつたが、ことにピンポンの玉を出すとき、彼女はあらあらしい表情をした。挑みかかるといふのではない。それよりは全身の重みでのしかかつて来る感じで、その感じが頂点に達したとき、濡れて光る白い球がからだから出た。からだ全体で異物を外に押し出す、そんな感じだつた。そのときに、その押し出す全身の力が表情にみなぎつ

て、彼女は笑っていたが、ドー猛に笑っていた。決してつくり笑いをしていたのではないと思う。それでいて、もちろん、ストリップの「医学観察」のときのような慈悲にみちたエンゼンとした笑いではない。そんな満ち足りたあでやかさはなかった。そこにあるのは何よりも不足で、不足があるとき、人間はドー猛になる。

花電車の通に言わせると、日本の花電車なら、こういうとき、客の反応をすばやく読みとる伶俐な表情をするものだという。あるいは、ことさらに無表情になったりする。女の無表情の典型を私はヨーロッパの賭場で見たことがあるが、トランプ賭けのカードを配る女の表情は誰を見てもしずまりかえつて、無だ。たかがトランプのカードの数に万金を投じ、失うお客をバカにしているというのでもない。自分のくらしがそうしたお客の愚行にひたすらよりかかっているのだという事実をよくわきまえている彼女たちには、それくらい安易なわけ知りの女子大生めいたシニシズムはない。と言つて、愚行につき従えば、とりもなおさず彼女たちの破滅で、彼女たちは破滅に賭けはしない。彼女たちの無表情と、そのしずまり返った表情からは想像もできないほどの素早さを基本にした、カードを切りくばる指の指さばきは、破滅によりそいはずするがつき従いはしない彼女たちの位置と意志をそのままにあらわしているのだろう。アジアの花電車の女の顔にはそうしたしずまりかえつた無表情はなかった。彼女のピンポン玉をあやつる手の動きには、それほどの伶俐、機敏な素早さはなかった。

何が不足しているのか。まず、金だろう。貧しいということだ。そして、金がそのすべてでは決してないにしてもすくなくともそのひとつの基本部分を占める幸福というものだろう。それが不足している。私はその都会で、その日の昼、経済学者と話していて、アジアのその国でのように第三世界

の人びとのくらしを考えるのにはなみの経済学の尺度とはちがった尺度がある、それは「幸福の分配」ということではないかという説をきいたばかりだった。あるいは、「国民総生産」(GNP)というのがあれば、「国民総幸福」(GNH)があつてよいではないか。いや、あるべきだ。彼はその国ではかなり名の知れた若手の経済学者だが、ミスター・マルクスもそんなことは言っていないよと言つて笑つた。大学を出てからアメリカ合州国に留学して、カリフォルニアの大学の大学院で数量経済学の勉強をして、電話帳ほどの厚さのある学位論文を書いて博士になつて、そのうち、「新左翼」の思想の洗礼を受けて、故国へ帰つてからはめでたく母校の大学教授におさまつて、いや、おさまりきることができないで学生といつしよにデモ行進をしたりする。このところのアジアのインテリのおさまりの人生コースだが、私も彼のようにこの国の人間だつたらどうするだろうかと彼に会うたびに考える。支配者は国にひろがる貧しさのなかで富み、肥り、人口の多数を占める人びとはただひたすらに飢え、痩せさらばえていた。その日もその話のあとで私の友人はスラム街へ私を連れて行き、道ばたにうずくまつた老婆が新聞紙をひろげた上に山盛りにして売つていた黒焦げの異様な物体を眼顔で指しながら、あれが何か、判るかねと言つた。イモリだろう。それとも、カエルか。私が答えると、ネズミだよ、ネズミのローストだよと私の答におおいかぶせるように言つた。平べつたい黒い、小さな物体には短かい尻尾がついていた。これもまた「ゲンブツ自体」であつた。その国は世界で指折りの米の生産国なのに、米を買えない人たちがあまたいた。彼らがネズミを買うのである。昔からあつたことではない。最近始まつたことであつた。飢饉のおかげではない。インフレーション、いや、スタグフレーションのおかげである。ネズミを買う人として、人の子である。ウンザリしながら食つて

いるのだと、経済学者は註釈を加えた。彼は泣きそうになっていた。

しかし、経済学者は飢えていたわけではない。そのスラム街には五百円で買える売春婦が多数いたが、なかに十二歳だという少女もいたが、彼は彼女たちのように稚いからだを売るといふようなことをしていたわけではない。花電車の女は彼女たちのようには貧しくはなかった。が、ちがいはわずかで、彼女のからだの線は農村出であることを示していた。彼女もまた食えなくて都会に出て来た口なのだろう。まだ二十代前半の若さにちがいがなかったが、からだの処々、特に尻から腰にかけて中年女のような疲れがあった。そこらがたるんでいるのである。ぐったりとしていた。若い女性特有のほりがなかった。中年男の私の眼は目ざとくそこあたりのことのありようをとらえていて、ときには私は視線を外した。

ただ、そこで私が同情、悲嘆のナミダを流し、今さらながら第三世界の貧困、それをもたらした人間たち（そのなかには「先進国」日本のまぎれもない一員である私自身も入っている）の責任を痛感したというのではない。あるいは、それを痛感しながら、なおも花電車のごとき女性を侮ジョクし、第三世界の人間を侮ジョクしている見世物を見ている、そこからフンゼン席をけて立ち去ろうとしない自分に自己嫌悪を感じたというのではない。それぐらいの安価な痛感、自己嫌悪なら、それこそ、はじめから来なければよかったのである。憤死ならぬ恥ずかしさのはての自己嫌悪死をとげればよかったのである。と言つて、逆に、そんな進歩派、革命派の若者じみた正義感を言つてみたところで何になるか、人生は、キミ、複雑だよ、キミの哲学では判らんことが山とあるなどと、いかにも中年男らしい傲慢——そううそぶきながらもさして自信のない傲慢に身をまかせるつもりもなかつ

た。あるいは、私は作家である、それゆえに非情の眼で人間の本质を凝視しているのだというたぐいのひとりよがりの思い上りも私にはなかった。花電車は「セックス・ショウ」で、だから、それをすべて社会問題に収レンさせることはできない。そして、セックスは重要ではあるがあくまで人間のくらしの一部で、そのすべてではないので、それだけを人間の基本要件ときめてかかるわけにはいかない。彼女がドー猛な表情をしたと言っても、その表情を貧困とか飢えとかだけに二重写しさせるのはおろかなことだろう。あるいは、そこで哲学的構想にふけるのも子供じみている。セックスはセックスで、社会からも哲学からもはみ出ているところがあつて、それゆえにこそセックスだ。もつと即物的にそうだ。それにはいやおうなしに「ゲンプツ自体」のところがある。そして、そちらがそうならこちら——つまり、私も「ゲンプツ自体」としてむきあう。対峙する。

つながりがあるのかどうか。

彼女と私とのあいだには、もともと、ことばによる「コミュニケーション通信」はなかったから、なおさら私はそういうふうなことを考えた、いや、感じとつたのかも知れない。ヨーロッパ語にはもとはラテン語の慣用句だが「イン・コミュニケーション」ということばがあつて、「ツンボ棧敷におく」ということだが、これは権力者が人をとらまえたときに極力愛用する手だてだ。彼女と私は、おたがいがおたがいを「イン・コミュニケーション」において、それはどうしようもなかった。そして、からだでからだをたしかめあつたというような、文学青年じみた言い方ができる状況もそこにあつたわけではない。乾ききつた大地のようなものだと思つた。その乾燥のなかに水が一筋流れているのかどうか、私には見当がつかねたが、流れているとすれば、その流れは細くはあつても決してかぼそくはないだろう。流

れには極地の氷の清レイな冷たさもなければ人の住まぬ砂漠のどまんなかの灼熱もなく、温度はあくまでなみの人間の体温なみの温度であるにちがいないが、それでいつもやさしい人肌のぬくもりであるというわけではない。

私は見ていた。

五

ヘンリー・ミラーは、「南回帰線」だったか「北回帰線」だったか、どちらかの作品のなかで、懐中電燈を使つて見る、いや、探索する「私」のことを書いている。なかに何があるのか。「私」はその想念、いや、妄念（と書いても、私はその種の想念のことを軽べツしているのではない。人間、誰しもの想念には妄念的などころがあるのだ。また、そこまで行かなければ、人の心を打ちほしない。ヘンリー・ミラーの「私」の妄想によつてたしかに私の心は打たれた）にとりつかれる。むなしい作業だ。「私」はそれを直覚的に知つていて、する。「私」と言わず、男には潜在的にそうした気持があるのだろうか。「お医者様ごっこ」から始まつて、ストリップの「医学観察」に至るまで、男は見たい。見たつてしようがないことは当人にもよく判つていて、それでいて、見たい。見た。見る。見るだろう。

心理学はいろいろに説明する。たとえば、自分が出て来たところをたしかめたい欲求。そこに立ち還りたい希願。「母を求めて三千里」である。そして、もちろん、性欲。あらあらしく、ただけしくそこを犯したい。そこに自分の夢であれ愛であれやさしさであれ暴力であれ、それらすべてを入れ

たい。突き入れたい。さまざまなものごとけ合い、まじり合い、コン然として——いや、そうは行かないだろう。コン沌として、そのままおもむく。どこへ。

入口はあるが、そのはての出口はない。それでもう一度、出て来るよりほかにない。いや、吐き出される。ちょうどピンポン玉のようにだ。花電車はそれだけの経緯をあらさま、まさしく即物的に語ってくれる。これでもかこれでもかと、ぐいぐいと押し来て見せてくれる。

懐中電燈による探索など、一方的なそれなど、はじめから拒否しているところがある。「見る」という行為があれば、「見返す」という行為があるだろう。ヘンリー・ミラーの「私」の懐中電燈によるのぞき込みに対して、ピンポン玉を押し返して来るということがある。同時に、「私」もまた、懐中電燈もろとも押し返される。外に押し出される。

見ていると、こちらがピンポン玉になることはないか。たしかめたいという知的欲求であれ、科学的探究心であれ、「母を求めて三千里」の希願であれ、性欲であれ、夢であれ愛であれやさしさであれ暴力であれ、コン然であれコン沌であれ、つまりはピンポン玉だ。そこまでことをものごとの基本のところにも押しやる力を花電車の主役の穴ポコ——「ゲンプツ自体」はもっていて、生まはんかの夢を見てもしようがない。見るなら、壮大な夢などとは小ざかしいことは言わない。せめて、空手形でない夢を見る。夢においても、「ゲンプツ」取引きをやれ。

そして穴ポコはピンポン玉を押し出すが、子供も押し出して来るのである。つまり、私もそこから出て来た。いや、逆の言い方をしよう。そのほうが、花電車の主役にピッタリする。子供も押し出すが、ピンポン玉も押し出す。私も出たが、ピンポン玉も出た。私もピンポン玉も同じだという、「ゲ

「ンプツ自体」に立ち戻れば、そこに徹すれば同じだというあらあらしきがあった。出て来た私は出て来た。ピンポン玉とむきあう。いや、ピンポン玉だつて、私とむきあっている。

これはなかなかむき出しの感覚だ。しかし、私はそこでひたすら深刻ぶっているわけではない。逆に、それほどの余裕もないと言える。事態は深刻だが、いや、まさにそれゆえに笑い出したくなる。笑いとは自嘲の笑いでもなければ、てらいの豪傑笑いでもない。もつと自然な笑いだろう。どう力んでみたところで、私とてピンポン玉と同じなのである。私ばかりでない、誰でもが、当の花電車の女までがそうなのだ。たしかに花電車には期せずしてユーモア、その途方もないのがあった。あらあらしきとともに、どうしようもないアホらしきがある。おかしきがある。おまえもアホなら、わしもアホやというアホらしき、おかしきがある。それはまた、アツケラカンとした事実認識でもある。

そのアホらしき、おかしきには、無限運動のアホらしき、おかしきがあるのではないかと思う。入れる、出す、入れる、出すのくり返しはどうあつてもコツケイだ。ただこのコツケイは軽妙に洒落のめし得ないコツケイさで、もつとしぶとい。少しでも軽侮の気持があつて、何のためにこんなことをやっているのかねと笑いながら言うのと、きみもやっているじゃないかと同じように笑いながらだがしぶとい答がたちまち返つて来るだろう。出すもの、出て来るものがピンポン玉でなく子供であつても、穴ボコなら、それを無限にやつてのけるけはいがある。子供、いや、人間はそこから出て、生き、育ち、死ぬが、穴ボコという「ゲンプツ自体」にことを即してとらえるかぎり、人間の穴ボコはいつまでも人間を生みつづける。出しつづける。

これを指して、生めよ殖ふやせよ、地にみてよというぐあいに人間万歳をとなえるつもりは私にはな

い。天才は悪いことをするし、地にみつる人口の大半のタダの人だつて、善事もすればけつこう悪事もする。天才の悪事の突つかえ棒ともなれば、エイジェントともなる。今から数年前、全共闘運動が下火になりかかったころ、若者たちのあいだに結婚し、子供をつくるのがむやみとはやつた。口の悪いのに言わせると全共闘運動の残したものは子供だけだということになるが、そのときの若者たちがよりどころとした論理（あるいは、これはもう信仰と言うべきものだろう。神だのみ、いや、子供だのみである）は、極端な言い方をすれば、革命は子供がやつてくれる、後事を彼らに託すというのである。これは、自分が生きているあいだに革命が起るとは思わない、子孫の時代になってそれは実現するのだ、自分は今その子孫のために動いているのだという世界のさまざまな革命実践家の言説のきわめて御都合主義的な変形でなかつたかと思う。生まれて来る子供にワタシの夢の革命は託しましたよ、あとはやつて呉れよなどと宣言して、自分は安心してミツビシ入りというところがかい間見えた。パパの革命の夢を託された子供こそ迷惑である。これでは、母親の勝手な出世の夢を押しつけられる教育ママの息子と本質的なところで変りはないではないか。そうじて言つて、そうした子供が革命家になる確率よりは親父同様ミツビシの社員になる確率のほうが大きく思えた。いや、もつと大きな確率は、彼がやがてそそくさと子供をつくつて、その子供に革命の夢を託すという図式を継承することだ。

革命であれ出世であれ、およそそうした夢を託された子供の誕生場所として花電車の穴ボコほど不適切なものはないにちがいない。さつきも書いたが、そういう空手形の夢、「ゲンブツ」取引きでない夢はそこでは拒否——いや、私の生まれ故郷の大阪のことを使つて言つてみよう。そこではアホ

みたいになる。

もう三十年も以前のことになる。巨大なくさの末期、その人口三五〇万の大都会は一夜にして焼跡という赤茶けたただの面積のひろがり化してしまつたが、そのころ人びとがおたがいをたしかめあうようにして言つていたことばがひとつあつて、それはガシンシヨウタンとかシンシユウフメツというような空手形のことばではなくて、「アホみたいなことになつた」であつた。そのころの世の中に充滿していたそういう空手形のことばが「アホみたいなことになつた」ばかりではない、それまで人びとが確固としたものと信じ、よりどころともなれば生きガイともなつていたことのたいていが「アホみたいなことになつた」。私自身の体験にひきつけて言えば、私は旧制中学の入学試験を受けるために試験の前日に疎開先から帰つて来たのだが、その夜の空襲であちこちの中学が焼け、おかげで試験は中止、全員無試験で入学というおかしなことが起つた。試験も「アホみたいなことになつた」のなら、試験勉強も「アホみたいなことになつた」わけだ。ついでのことにもうひとつ、それまでの疎開だつて帰つて来た日の夜に大空襲があつたのだから、これもまた「アホみたいなことになつた」。

空襲のあと衝撃を受けたのは、やはり焼跡でむくろの数々を見たことだが、もうひとつ、消防自動車黒焦げになつてひっくり返つていたことだ。本来なら火を消すための道具が逆に黒焦げになつてひっくり返つてゐるのは、悲惨であるとともにおかしなことであつた。あらあらしく現実がむき出しになつていたが、その現実にはたぶんアホらしきがあつた。「アホみたいなことになつた」と言うほかはない。

あきらめもあれば絶望もあれば自嘲もあつた。ただそのことばには、もうこうなつた以上は「ゲン

「ブツ自体」で行くよりほかにない、「ゲンブツ」取引きをやるよりほかにないという認識と志こころざしがあつたと、私は自分の実感に即して言う。火を消すなら、消防はあてにならぬ。自分で消す。逃げるのなら、自分の足で逃げる。逆に言うとうと、赤茶けた面積のひろがりはそこまで人びとを押し、私を押ししていた。そこで子供が生まれるとしたら、いや、いつでも子供は生まれ、そのときも生まれたのだが、夢の託しようがない。穴ボコからそれはただ出た。すでに生まれていた私自身にそくして言えば、私はただ生きていた。私は私自身の花電車の主役だった。つまり、穴ボコだった。私はどんな表情をしていたのか。

六

私も飢えていた。

飢えは、食と性の双方にあった。

食について言えば、私は飢え死にもしなかつたし、ネズミのローストも食わなかつたが、後者も私の眼のまえにそのときあつたなら、食べたのではないかと思う。すくなくとももう半年巨大ないくさがつづいていたら、私はためらわずにそうしただろう。私の家は軍需産業にまるつきり縁がなかつたし、田舎にもたよりになる縁者はいなかつた。「ブツブツ交換」(それこそまさに「ゲンブツ」取引きの極だ)のタネとなるタンスの底の母の着物ももうおしまいい近いところだった。私は仕方がないので、「食い物づくし」の小さな本をつくつた。中学一年生にしてもまことに幼稚なものをつくつたものだと思うが、本人は真剣だった。だいたい「イロハ」順に一ページごとに食い物の名前がひとつ(つ

まり、それが私の食べたい、腹いっぱい食べたい食物だったわけだ」と、その食い物の絵がある。もちろん、私が描いた下手クソな絵だ。最近、姉がこんなものが出て来たと言ってくれたのがその「食い物づくし」だが、それにしても哀れな本をつくったものだと思う。本自体が昔のデパートの包み紙や回覧板の回状の余白やらをよせ集めてつくったものでそれだけでも見ずばらしいが、もつと見ばえのしないのは中身だった。たとえば一ページ目の「イ」なら、「イチゴ」でも出て来るのかと思つたら「イモ」、「メ」のところは、もちろん、「メシ」、「ゴ」のところも「コメ」、「フ」のところは「フカシパン」、「ト」に至つては、「トウニユウ」、つまり、豆でつくった代用牛乳である。面白いのは、本物の「ギウニユウ」やら「ミルク」やらがそこに姿を見せていないことで、そちらのほうは私ははじめからあきらめていたのだろう。それぐらいのものが無いのだから「ビフテキ」やら「サシミ」やらが私の食い物づくしに入らないのは当然だが、考えてみると、そうした高級な食い物はそれ以前の物資がゆたかな時代でも私はほとんど食べた記憶がない。日本はまだまだ貧しくて、私の家が属する中産階級も貧しかった。

姉は知らないが、私がつくつたのは「食い物づくし」だけではなかった。こちらのほうは決して本になどはしなかったが、ひそかに描いているものがあつて、それは「人体づくし」だった。「人体づくし」と言つても、胃袋やら肺やらがあつたわけではない。かんじんなものはただひとつで、たいていの場合、私は実際には描かなかつた。その代り、いつも、心のなかで描いていた。夜、眼を閉じると、すぐその絵が出て来て、朝になつても昼になつても、消えて行くことはなかつた。

兄が医者になる修業をしていたので、絵のモトとなる資料にはこと欠かなかつた。兄がいない日中、

私は兄の本棚からぶあつな本を抜きとり、もうそらんじてしまったページを開けると、色つきの絵が現われる。それは、人の局部だけを大きく拡大して、太モモであれ腰であれ乳房であれ、もちろん、顔、頭であれ、あるいは、心であれ、一切の夾雑物を排除した「ゲンプツ自体」で、私はそこに眼をこすりつけるようにして見ていた。あたかもそうすることで「ゲンプツ自体」のにおいを嗅ぎとり、内部にまで到達できるかのようにである。

私に「ゲンプツ自体」のことをはじめて教えてくれたのは、うどん屋の息子の関口だった。小学校四年生——いや、もうそのときには「国民学校」というものにたしかになっていた。その国民学校四年生のときであったと思う。街をうろつき歩いているうちに落書きにぶちあたった。コンクリートのザラザラした壁に大きく古典的な二体の人体の結合断面図があった。さらに横手にこれも大きく「ゲンプツ自体」の大写しが、あと数年経って兄の本でおなじみになる姿かたちで描かれている。「これ、何や判るか。」関口は結合図のまえで立ちどまり、私より優位の位置に立った姿勢と口調で言った。関口はうどん屋の息子で、ラムネ玉の遊び方、講談本の知識、ケンカのタンカの切り方からちよつとしたかつ払いのやり方に至るまで、弁護士の子で彼から見ればたしかに「ええしのボン」であった。「ええしのボン」にすぎなかった私に比べるとはるかに通ギョウしていて、私に対していつも大人ぶっていた。ことにそういう性の神秘にかけては、たいして知りはしなかったにちがいないが、私よりはるかに知っていたことも確実だろう。私はそれまでそうした結合図も見たことがなかったし、「ゲンプツ自体」の図もはじめてだった。ただ、それにもかかわらず、それらが何であるか、何を意味するものであるかは、関口が「これ、何や判るか」という問を発するまえに判っていた。

これはふしぎな直感だと思う。人間にはそういう直感が内在的にかねそなわっているのかも知れない。それより少し以前のことだが、私はいつも大阪の街をひとりでほつき歩いていて、そのあてもないほつき歩きのなかで、飛田遊廓のなかにさまよい入った。そのときの感じをいまだにありありと私は思い出すことができるような気がするのだが、まっ昼間なのにとたんに街は静かになり、そこは異様に明るかった。女たちの化粧が明るかったのか、それともその化粧にまともにあたる太陽の光が明るかったのか、化粧品に肌色のものがあるが、私の印象では、そこら一帯が肌色に輝いて見えた。そして、とたんに、私には判っていた。私は人体結合についての知識をそのとき何らもちあわせていなかったが、そこが何であるかが判っていた。何が判ったのかは今もってはつきりしないが、私にそのとき実感できる感覚があつて、それはたしかに判つた、という感覚だった。

さきに判つてしまつていたのだから、関口の、これ、男と女がやつてはるとこやとか、女のおそこやで、こつちは、ということばにはたいして感動しなかつたにちがいない。それで、関口は、私の腕をとつてその描かれた「ゲンブツ自体」に手をふれさせながら、これ、おまえのお母ちゃんにかてあるんやぞといばつた口のきき方をしたのだろう。関口はあきらかに焦らだつていて、私の手を乱暴にその図柄の上にこすりつけた。ザラザラとした感触だった。コンクリートの壁面だったからそうあつてあたりまえだったが、私がある感触を数年後にも反スウするようにあざやかに思い出し、今日までもおぼえているのは、やはり、その図柄の特異性によるものだろう。「痛いかな」と私は言い、実際、掌の一個所にうつすらと血がにじんでいた。

ふつうなら「ええしのボン」とは言え負けていなかった（つまり、大阪ことばで言えば、関口ほど

に「ワル」であり「ゴンタ」であったということだ）私のことだ、おまえのお母ちゃんかてもつてるやないかとすぐ負けずに言い返しただろうが、やはり「ゲンブツ自体」の図柄はそれほどの衝撃力をもっていたのだろう、私はそれつきり黙ってしまった。今でも思い出すがそれは私たちがそのころ地面にこすりつけるようにして陣とりの場面設計を書いたりしていたロー石で描かれていて、その図柄もコンクリートの壁面にこすりつけられたようにしてあった。よほどの力と情熱をもつて描いたのではないかと思う。これでは消してもあととはリンカクがかえつてあざやかに残るように見えた。それに克明だった。そこだけ赤いロー石を使って、「ゲンブツ自体」のなかでもつともかんじんの心の部分だけ赤く浮き上っていた。

私が黙りつづけているのでさらに焦らだったのか、彼はその中心部分を自分の手で押しながら、おまえかつて、ここから出て来たんやでと言った。いや、さらに、天皇陛下かつて、ここから出て来はつてんとつづけて言った。

そこまで言つてしまえば、皇后陛下にかつて、これがあるねんとも、あるいは、横手の人体結合図をふり返つて、天皇陛下かつてこれやりはるねんとも彼がつづけて言ったのは自然の流れだったにちがいない。ただおまえかつて、ここから出て来たんやでと言つたとき、彼はいかにもにくしげにそう言い放つたのだが、あとはどうだったのだろう。私がおぼえているのは、そのときの彼の表情がいかにもドー猛なものであったことだ。彼は笑つていて、それはいつにないただけしい笑いだった。そして、そのただけしい笑いに顔全体が輝いて見えた。

そのころ、紀元節や天長節の儀式には学校へ行つた。儀式は講堂で行なわれて、そこで御真影を拝み、

校長が教育勅語を読む。私たちは頭をたれてそれをきくのだが、そのとき、誰かが、必らず、天皇陛下下かつてババしはるんやでと小声で言い出す。その誰かは関口であつたりふとん屋の息子の佐々木であつたり父親が市電の車掌をしていてそれで「チンチン」（チンチン電車の略だ）というアダ名で呼ばれていた黒川であつたりしたが、みんなは彼らの誰かが言い出すのを待つていて、待つているあいだはからだがふるえて来るぐらいのスリルがあつた。あまりのスリルのゆえに、おしまいには、そのことばが耳に達したときにはふしぎに安堵した気持になつたことを私はいまだにおぼえている。そして、無事にその瞬間が来て、先生に聞きとがめられることなくそれがすぎたあとも、笑い声をたててはならない。一度だけだつたがクスクス笑いがひろがつて、あとで全員廊下に立たされたことがあつた。

その不ソソな文句の言い出し役はきまつていたように思う。主として前記の三人だが、たまに他の誰かが言つた。ただ暗黙のうちには「ええしのボン」でない連中によつて独占されているらしくて、私は一度、それこそ決死の覚悟でそんなふうなことを口走つたのだが、誰も反応を示さなかつた。笑い声はおろか、どのような反応も立ち返つて来なくて、私はいつになく傷つた。

関口は言い出し役のレギュラーのひとりだつたから、その「天皇陛下下かつてババしはるねん」の延長線上にあつたのだらう、それで彼はこともなげにそんなふう言い放つたのにちがいないが、私の場合はそうではなかつた。私の耳には、あきららかに二つは異質なことばとしてひびいた。二つのことば、認識、あるいは、思想のあいだにはあきらかに切れ目があつた。いや、それは関口の場合とて同じでなかつたかと思う。

やはり、性というものにはふしぎな力があつて、それは彼のような「ワル」、「ゴンタ」の少年をも打ちのめしにかかる。それで、彼はそれらのことばを言ったときにあんなドー猛な表情をしていたのだろう。そうでないと、打ちのめされてしまう。実際、「天皇陛下かつてババしはるねん」ということばも当時にあつてはしたたかな認識であつたが、彼がそこで私にむかつて口にしたことばが押し出す認識は、もつと激しいものだった。性はいやらしいことで、誰からも教えられずにも先験的にそういうことになつていて、そして、得体の知れない不気味なことで、しかも、もつとも怖しいのは人間誰しもがそこから脱げ出ることができないということ、それは私も直感的に感じとつていて、その性のどまんなかに私もいれば私の母親もいれば、天皇陛下、皇后陛下までがいる。いつしよくたにいる。「ババする」ことは私もしていたから、かえつて安心なでなかつたのかと思う。それで、「天皇陛下もババしはるねん」ということばも、たんにスリルにみちたタイミングの問題にすぎなかつたにちがいない。すくなくとも人体結合図、「ゲンブツ自体」の落書きをまえにしての関口のことばと比べてみればそうで、後者はそこで問題の質をことにしていた。子供心にも私はその問題の異質性を感じて、それでこわかつたのでないかと思う。今ようの言い方をすれば、そこで関口と私は無意識のうちにタブーを打ち破り、それが強固にかたちづくつていた境界線をこえていたことになるが、私にそのときそんなことが判つていたはずがない。私はただ無性にこわくなつた。関口もおそらくそうだったのではないかと思う。それで、あんな表情もすれば、いつにないただけしい笑いを笑つたのかも知れない。そして、もうひとつ言えば、こわさのなかにある魅惑もふくまれていることも事実だった。関口の顔全体が輝き、たぶん、私の顔もその照り返しのようにして輝いていたにちがいない。顔ば

りか、からだ全体が火照^{ほて}っていた。

数年経って、兄の本棚から抜き出した本で「ゲンブツ自体」に対したとき、私はまざまざとそのときのこわさとからだ全体の火照りを思い起していた。いや、それは兄の本の本の所定のページを開くごとにくり返して感じとられる感覚で、あきらかに私はそこで受け身だった。何か強烈な力をもつものがないで、それがいやおうなしにこわさと火照りをもって私に迫って来る。

わずか数年の時間のへだたりだったが、人体結合図と「ゲンブツ自体」にはじめて対面したときとは大きなちがいがあつた。社会にとつても、私にとつてもそうだった。数年まえには、私のまわりで人びとは、皇軍は強まつせ、やりよりまつせと言っていた。今はもう誰もが言わなかつた。数年まえ、父は、日本は敗けると言い、私を怒らせたのだが、今はもう自分の予言が的確に実現して行くのを見ながらかえって何も言わなかつた。父をふくめて人びとはものを言わず、代りに眼がささやきあつていた。どないになりますねんやろ。そして、そのうち、人びとの多くがだしぬけにいなくなつた。空襲が来て、人びとが眼でささやきあつていたところが赤茶けたただの面積のひろがりになつてしまつた。つまり「アホみたいなことになつた」。

私にとつての大きなちがいは、背丈は伸びたが、からだにまるつきり力が入らなかつたことだろう。私は飢えていた。食と性の双方において、そうだった。もつと極端な、それこそ餓死寸前までの飢えが来ればべつだろうが、育ちざかりの人間の力はやはりなかなかのものだと言つてよい、性の飢えは食の飢えとともに着実に私をとらえていた。いや、かえつて、飢えにとつても相乗作用というものがあるのではないだろうか、そこへもつて来て、空襲があればそのあと焼跡の片づけに行つて、黒焦げ

のむくろを鋏で引っかけて処理するというような十四やそらの少年らしくないことをやっていた日常があつた。私をふくめて、その十四やそらの飢えた少年が性にまっすぐに立ちむかつて行つたとしてもふしぎはない。恋愛というようなものをまったく通過しない、介在しない性だ。それが、彼ら、つまり、私のまえにあつた。

さつき私は空襲のおかげで旧制中学に無試験で入学できたと書いたが、おかげで、本来ならその「名門」と言われる中学には入学できがたい者までが入つて来ていた。ことに、一年まえに入試に失敗して高等小学校に行つた連中が大量に入学して来ていて、彼らは一年、動員されて工場で働いていたから、すでに大人であつた。入学式の翌日だったか、彼らのなかでケンカが始まり、始まつたかと思うと三、四人がかくしもつた長いナイフ状の銅片をとり出したには度胆をぬかれた。ドスとでも言うほかにないものだが、彼らは動員先の工場の旋盤でそんな物騒な「ブツ」をつくり上げて来ていたのである。いくさが終り、さらに後年になつて中学教師になつた私は一年生を受け持ったときに、平和な時代の中学一年生がいかに平和的であるかをつくづくと感じ入つた。いや、実を言うと、私はその一年生の八月にいくさが終つたあと、軽い結核にかこつけてズル休みをしてもう一度一年生をくり返す破目になつてしまったのだが、次の一年生は正規の試験を受けて入つて来た連中で、なかにそんな自己製のドスをふりまわすようなのはいなかった。そして、誰も彼もがひどく子供に見えた。

ドス組のケンカのベテランたちが性のことがらについて、私よりはるかに大人であつたことは言うまでもないだろう。彼らのうちの何人がほんとうに異性を知っていたか知らないが、彼らは女についてばかり話していた。いや、女についてばかり話していたと言うより、やはり、性についてばかり

話していたと言うべきだろう。恋愛のことはおろか、どこかの女学校の生徒のセーラー服姿の姿態とか顔の美醜とか、あるいは、もつと直接的に乳房とか腰とか尻とか脚とか、そういうことがらについて語ることもまれで、話はいつでも「ゲンブツ自体」だった。そのあたりのまわりをまわっていた。それと、それに対する自分の「ゲンブツ自体」。話題はそこにつきた。

と言うことは、彼らとともにあつた私の関心もそこにつきたと言うことだ。私が恋愛といくさは、やはり、どうにも相反するものではないかとひそかに信じているのは、そのときの体験がからだの底にあるからだろう。すくなくとも、まだ恋愛をしたことがない少年にとつてはそうだと思ふ。私が初恋めいた感情をひとりの少女にもつたのは、いくさが終り、平和が来てからだつた。それまでは、まず「ゲンブツ自体」が私の感覚といい思考といい情緒といい、その中心にそれらを窒息させるほどに大きくひろがつてあつて、私は逃げ場がなかつた。

自慰のやり方は知っていたが、うまく行かなかつた。夢のなかではうまく行くのだが、自分でやるとうまく行かない。それで、余計、私は逃げ場がなかつたのでないかと思ふ。私はときどき兄の本を開き、みつめ、本を閉じてから反スウするようにして心にその図柄を描いた。私の実感では、心の底にあのコンクリートのザラザラした粗い壁面があつて、私はそこに白、赤ふた色のロー石でこすりつけるようにして描いた。

何度も空襲があつた。赤茶けたただの面積がかつての大阪市の大部分に及ぼうとしていた。私はよくその面積のなかをあてもなく歩いた。夏が近づいていて、面積には丈高い草が生えて、ときに草の密集のなかに入ると、草いきれが私をとり込んだ。私がおぼえているのはその草の根のかたさと草い

きれにこもるにおいで、前者は草を引っこぬいて焼跡に野菜畑をつくろうとする私を泣かせた。後者について言えば、それは奇妙に性的なおいだった。草いきれのなかで、私はあぎやかに「ゲンブツ自体」の図柄を思い出し、必ず心の底のコンクリートの壁に描いた。

そして、ある日、実際に私はコンクリートの壁にぶちあたっていた。丈高い草の茂みを押しわけて行くと突然あらわれたのがコンクリートの壁で、それは粗くザラザラしていた。焼けビルの壁面のもろさはなかったからそこは疎開あとの家の壁だったのだろう。私はあたりを見まわして誰もいないのをたしかめると、すばやく地面から拾った瓦のカケラでこすりつけるようにして描き始めた。草いきれのおいと自分の動作と、それが描き出して行くものとの、私は異様に興奮していた。私は右手で描き、左手で自慰の動作に移ろうとしていたから、もう少しのところで、それまで夢のなかでしか得られなかった快楽を獲得することができたかも知れない。そして、そのとき、私はあの関口のいくつかのことをまざまざと思い起していた。まず、おまえかって、ここから出て来たんやで。そして、天皇陛下かって、ここから出て来はってん。皇后陛下にかつて、これがあるねん。天皇陛下かってこれやりはるねん。

そのことばのいくつ目までを思い出したか、私は記憶していない。おぼえているのは、突然、首を背後からつかまれ、そのまま壁にそつてずり落すようにして図柄に顔を押しつけられたことだ。そこではじめにどういふことば、いや、怒号があつたのかも記憶していないのは、粗い壁面に顔を乱暴に押しつけられて痛かったのと息ができなかったからだ。ようやく体勢を取り戻して頭を背後からおさえつけている手をはねのけようともがいたところで、手の力がゆるんだ。ふり返ると警防団の制服を

着た中年男が立っていて、男はやにわに、おまえ何落書きしてた、とどなった。それから、この聖戦のさなか、皇国の興廢この一戦にありという非常時に、非国民め、おまえは何をやっているんだというおきまりのお説教が始まった。私は半ば描き上った「ゲンプツ自体」を背中にかくすようにおおいながら頭をたれて彼の威丈高なお説教をきいていたが、それはこわかったというより、言いようなく恥ずかしかったからだ。そのときもからだ全体が火照ったが、快感はなかった。ただ、恥ずかしかった。やがて男は壁の落書きを削り取るように命じ、私は瓦レキをいくつか拾って懸命に削り取ったが、男はそのあいだ手伝おうともせずただ黙ってタバコをくゆらせていた。そして、私がようやく削り終ると、ヨシ、と軍隊口調で言い、もうするなよとこれは民間人の口調でつづけ、私がうなずくと、おまえ、落書き、下手クソやなアとくだけた言い方でしめくくるように言った。男としては、そのしめくくりでとりなしたつもりだったが、私の恥ずかしさはかえって倍加した。私は自分の内心の醜悪さとともに能力の無さまで見すかされたような気持ちでいたたまれなかった。

家に帰ると、母がどないしはりましたん、頬つぺたに血がついてますがなと心配げに言い、私にはその案じた口調が何よりもうとましかった。母が私が下手クソやなと男によって許された落書きに描いたものをもっている存在であることを私は痛切に思い、その思いはたえがたかった。私がそこから出て来た存在であることもたえがたかった。それでも、それ相応に「ワル」であり、「ゴンタ」である私のことである、兄と共用である二階の部屋に戻って私の机にむかうと、それでどうやというねんとひとり言を言い、それで少し元気になった。

つづきは製品版でお読みください。